宮沢賢治『春と修羅』第二集の構想 試論(二)：昭和三年初夏に構想された詩集本文の復元

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1986-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1578

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

宮沢賢治『春と修羅』第二集の構想　試論（二）

――昭和三年初夏に構想された詩集本文の復原――

杉浦　静

宮沢賢治の詩集『春と修羅』第二集は、詩人の生前未刊行の詩集である。

現行の「校本宮沢賢治全集」及び「新修宮沢賢治全集」（ともに筑摩書房）に収録されている『春と修羅』第二集は、宮沢賢治死後残された草稿のなかで、著者指定の期間（大正一三、一四年）に収まる日付を持つ作品一一三篇を日付順に並べ、それぞれの草稿の推敲の最終形態を本文としたものである。草稿執筆及び推敲の時期は、大正一五年から昭和八年に及んでいる。

ところで、大正一五年終りから昭和二年はじめにかけて、それまで、手帳あるいはメモに書かれてあった草稿が、赤罫詩稿用紙にまとめて書きうつされた。そして、さらに昭和三年にかけて推敲の手が入れられた。これが、「校本宮沢賢治全集第三巻校異において、下書稿㈠とよばれる草稿のうち、赤罫詩稿用紙を用いられているものである。昭和三年春には、藤原嘉藤治・菊池武雄の勧めにより詩集出版が具体化し、「序」が書かれ、赤罫詩稿用紙使用の下書稿㈠より三九篇が選択されて、その推敲の最終形態をもって、一応の本文と定められた。

以上の経緯によって構想をされた昭和三年初夏段階の「第二集」本文が、以下に掲げるものである。推定の根拠等は、拙稿「宮沢賢治『春と修羅』第二集の構想　試論」（「日本文学」昭60・11）に論じたのでそちらにゆずる。なお、本文決定は、「校本宮沢賢治全集」第三巻校異（筑摩書房　昭50・6）及び宮沢賢治記念館蔵の自筆詩稿をもとにして行った。また、作品番号は、便宜的にゴチックで示した。（草稿にその指示はない。）

※　※　※

序

この一巻は
わたくしが岩手県花巻の
農学校につとめて居りました四年のうちの終りの二年の手記から
集めたものでございます。
この四ヶ年はわたくしにとって
じつに愉快な明るいものでありました
先輩たち無意識なサラリーマンスユニオンが
近代文明の救興以来
或ひは多少ペテンもあったではありませうが
とにかく巨きな効果を示し
絶えざる努力と結束で
獲得しましたその結果
わたくしは毎日わづか二時間乃至四時間のあかるい授業と
二時間ぐらゐの軽い実習をもって
わたくしにとっては相当量の俸給を保証されて居りまして
近距離の汽車にも自由に乗れ
ゴム靴や荒い縞のシャツなども可成に自由に選択し
すきな子供らにはごちさうもやれる
さういう安固な待遇を得て居りました
しかしながらそのうちに
わたくしはだんだんそれになれて
みんながもってゐる着物の枚数や
毎食とれる蛋白質の量などを多少駸剰に計算したかの嫌ひがあり
ます
そこでたゞいまこのぼろぼろに戻って見れば
いさゝか湯漬けのオペラ役者の気もしまするが
またなかなかになつかしいので
まづは友人藤原嘉藤治
菊池武雄などの勧めるまゝに
この一巻をもいちどみなさまのお目通りまで捧げます
たしかに捧げはしまするが
今度もたぶんこの出版のお方は
多分のご損をなさるだらうと思ひます
そこでまことにぶしつけながら
わたくしの敬愛するパトロン諸氏は
手紙や雑誌をお送りくだされたり
何かにいろいろお書きくださることは
気取ったやうではございますが
何とか願ひ下げいたしたいと存じます
わたくしはどこまでも孤独を愛し
燃く湿った感情を嫌ひますので
もし万一にもわたくしにもっと仕事をご期待なさるお方は
同人になれと云ったり
原稿のさいそくや集金郵便をお差し向けになったり
わたくしを苦しませぬやうおねがしたいと存じます
けだしわたくしはいかにもけちなものではありますが
自分の畑も耕せば

冬はあちこちに南京ぶくろをぶらざげた水稲肥料の設計事務所も
　出して居りまして
おれたちは大いにやらう約束しやうなどいふことよりは
も少し下等な仕事で頭がいっぱいなのでございますから
さう申したとて別に何でもありませぬ
北上川が一べん汎濫しまするとと
百万疋の鼠が死ぬのでございますが
その鼠らがみんなやっぱりわたくしみたいな云ひ方を
生きてるうちは毎日いたして居りまするのでございます

一四　〔湧水を呑まうとして〕

一九二四、三、二四、

湧水を呑まうとして
（却って）犬の毛皮の手袋などを泥に落とし
あわててぴちゃぴちゃ洗ったりするものだから
きせるをくわいたり
日光に当ったりしてゐる
小屋葺き替への、村人たちが哂ふのだ

一九　村道

一九二四、三、三〇、

電線は伸びてオルゴールもきこえず
赤揚の梢の玻璃の網や
山の尖の稜も
あんまり淡くけむってゐて
まるで光と香だけでできてるやう
湿田の面は
まだ氷晶をたもってゐるが
乾田の雪はたいてい融けて青いすゞめのてっぱうも
もうあちこちに萠え出した
みちはやはらかな湯気をあげ
次から次と町へ行く馬の足なみはひかり
その一つの馬の列について来た黄いろな二ひきの犬は
尾をふさふさした巨きなスナップ兄弟で
ここらの犬とはげしく走って好意を交はす
ひばりはうろこ雲に飛び
また日の面のうす霧や
麩を買って奠をつくり
雪消の水に種籾をつける
今日は彼岸の終りである
また灰光のくるみの森や
何が出るともわからない
巨き〔作〕なのトランプ札の
まづ一枚が
今日おだやかにめくられる

二五　早春独白

一九二四、三、三〇、

根もとの紅い萓でつくったすみすごを
頭帛もぬれて背ひながら、急いであなたが電車に乗れば
ひるの電燈は雪ぞらにつき
窓のガラスはぼんやり湯気に曇ります
　…青じろい凝灰岩の反射と
　　いそがしく顫ふモーター…
根もとの紅い萓でつくった木炭すごを
もう百枚もせなに負ひ
山の襞もけぶってならび
川もごうごう激してゐる
凍えて赤い両手を頬で暖めながら
この町行きの背物電車にかけて来て
あなたはわづかに乗ったのでした
　…雨はすきとほってまっすぐに降り
　　雪はしづかに舞ひおりる
　　妖しい春のみぞれです…
みぞれにぬれてつつましやかにあなたが立てば
ひるの電燈は雪ぞらに燃え
ぼんやりくもる窓のこっちで
あなたは赤いナッセンネルのひときれを
エヂプト風にかつぎにかへます

…氷期の巨きな吹雪の(裔)は
　ときどき町の瓦斯燈を侵して
　　その住民たちを沈静にした…
わたくしの黒いしゃっぽから
つめたく明るい雫が落ち
どんよりよどんだ雪ぐもの下に
黄いろなあかりを点じながら
電車はいっさんにはしります

二九　休息

一九二四、四、四、

中空は晴れてらかなのに
西嶺の雪の上ばかり
ぼんやり白く淀んでゐる
いくつかの雲の肖顔が注2
巨大な洞崑人類の
方向のない Libido をかかげ
ひばりはあちこち啼いてゐる

氷と藍との東橄欖山地から
つめたい風が吹いてきて
ねむたいわたしのもとに

つぎからつぎとまことをちかひ
またあかしやの棘のある枝や
すがれの禾草を鳴らしたり
三本立ったよもぎの茎に
ふしぎなおどりをさせたりする
（エッコロ　クアア）
数知らぬひかりの点がうき沈み
乱積雲の肖像はいまゆるやかに北へながれる

（eccolo qua!）

四五　海蝕台地

一九二四、四、六、

日がおしまひの八分圏にはいってから
そらはすっかり鈍くなり
台地はかすんで優鉢羅華燈油の海のやう
…かなしくもまたなつかしく
遍路の春の胸を嚙む
求宝航者の海のいろ…
そこには波がしらの模様に雪ものこれば
いくつものからまつばやしや谷は
あえかなそらのけむりにつゞく
…それはひとつの海蝕台地
むかしの海の記念碑である…
たよりなくつけられたそのみちをよぢ
わたくしはこのかなしい夕景のなかに消えてゆきたい
ぼんやりつめたい四月のしろいそらになりたい

五二　嬰児

一九二四、四、一〇、

なにをしてゐるともわからない
ひろおいそらのひととこで
まばゆい黝と白との雲が
つぎからつぎと爆発される
（そら、たんぽぽだ。
しっかりともて。）
それはひとつづゝそらの鏡の射面を過ぎて
いっぺんごとにおまへを青くかなしませる
（済むも済まないも
みんなこっちのかんがへだ）
鳥は褐色に膨らんだ
うしろの杉の梢にはいる

七四　普香天子

一九二四、四、二〇、

お月さま
東の雲はいま蜂蜜のいろに燃え
丘はかれ草もまだらの雪も
すっかり明るくなりましたが
おぼろにつめたいあなたのよるは
もうこの山地のどの谷からも去らうとします

ひとばんわたくしがふりかへりふりかへり来れば
巻雲やあるひはけぶる青ぞらを
しづかにわたってゐらせられ
また黎明のはじまりには
二つの雲の炭素棒のあひだに
黄いろの古風な弧光のやうに
熟しておかかりあそばした
むかしの普光天子さま

あなたの近くの雲が凍れば凍るほど
あなたがそらにお吐きになる
エステルの香は雲にみちます
おつきさま
あなたはにはかにくらくなられます

八六　郊外

一九二四、五、四、

風が七時の汽車のひゞきを吹いて来て
はやしの縁(ふち)で巨きな硝子(ガラス)の壁になる
　…その半成のローマネスクの内側で
　　鷲がするどく叫んでゐる…
こんどは風のすこしの外れを
かへるはにはかにぼそぼそすだく
蒼く古びた薄明穹の下である
　…こんやも山が焼けてゐる…
野原ははげしいかげらふの波
いちれつゆれる停車場の灯と
濁って青い信号燈(シグナル)の浮標(ヴイ)
　…焼けてゐるのは達曽部あたり…
あたらしい南の風が
彎みを越えて砕ければ
そこからほのかな野ばらのかほりもながれてくる
　…こんどは山火が二つになる…
シグナルは赤くかはってすきとほり
急行列車の骨格が
防雪林を音なく北へかけぬける

かへるはあちこちしづかにすだき
星のまはりの青い雰囲気
こんどは暗い一つの風がにはかな北のいなびかりからわづかに白
く洗はれる

九〇　春

一九二四、五、六、

祠の前のちしゃのいろした草はらに
木影がまだらに降ってゐる
　…鳥は、コバルト山に、翔け…
ちしゃの色した草地のはてに
杉がもくもくならんでゐる
　…鳥は、コバルト山に、翔け…
那智先生の筆塚が
青ぐもやまた五月の底で
銭のかたちの粉苔をつける
　…鳥は、コバルト山に、翔け…
二本の巨きなどぐまつが
荒さんで青く塚のうしろに立ってゐる
　…鳥はコバルト山に翔け…
樹のいちいちの心からは
虚像が惑く風に描かれる
　…鳥はあっちでもこっちでも
朝のピッコロを吹いてゐる…

九三　〔曠原淑女〕

一九二四、五、八、

日脚がぼうとひろがれば
つめたい西の風も吹き
黒くいでたつ村娘が二人接骨木藪をまはってくる
けらを着　縄で胸をしぼって
睡蓮のやうにわらひながら
ふたりがこっちへあるいてくる
その蓋のある小さな手桶は
ある日は青い蕈菜を入れ
欠けた巨きなの椀を泛べて
朝がこれより爽やかなとき
町へ売りに来たりする
赤い漆の小さな桶だ
めいめい鍬を二梃づつ
けらにしばってゐるものだから
この人たちは
鳥の踊りの舞手とも見える
そんなら風よ
おまへがいつか、ステップ地方で歌ったやうに、
今日はいちにち

この人たちのはたらくそばでふるえてくれ、
今日はいちにち風よたのしいおまへのことばを
この人たちにささやいてくれ

一一六　水の結婚

一九二四、五、一九、

東には黒い層積雲の棚ができて
古びた緑青いろの北島が
ひるの寂寥をたたえてゐる
その突端と青い島のさけめから
ひとつの漁船がまばゆく尖って現はれる

波は潜まりやきらびやかな点々や
反覆される四部輪唱[注3]の水平や
　…その面映ゆいいくたびの正反射…
あるひは海蒼と銀との縞を織り
また錫病と伯林青(プルシャンブルー)
水がその七いろの衣裳をかへて
　…東邦風のあかるく喧澄な結婚式…
わたくしに誇ってゐるときに
けむりはながれ
水脉はさびしい砒素鏡になる

わたくしは南に一つの山彙を見
また雨雲(ニムブス)の渦巻く黒い尾をのぞむ[注4]

一三三　島嶼

一九二四、五、二三、

うす日の底の三稜島は
樹でいっぱいに飾られる
海はもとより水銀で
たくさんのかがやかな鉄針は
水平線に並行にうかび
ことにも繁く島の左右にあつまれば
鷗の声もなかばは眩む
パリスグリンの色丹松や緑礬いろのとどまつ、ねずこ
また水際には新たな銅で被はれた
巨きな枯れたいたやもあって
風のながれとねむりによって
みなさわやかに酸化され還元される

二七　鳥の遷移

一九二四、六、廿一、

鳥がいっぴき葱緑の天をわたって行く

わたくしは二こゑのかくこうを聴く
あのかくこうがすこうしまへに啼いたのだ
それほど鳥はひとり無心に飛んでゐる
鳥は還り
あとはだまって飛ぶだけなので
ここはしばらく原始のさびしい空虚になる
…きららかに畳む山地と[注5]
青じろいそらの縁辺…
鳥はもう見えず
いまわたくしのいもうとの
墓場の方で啼いてゐる
…その墓森の松のかげから
黄いろな電車がすべってくる
ガラスがいちまいふるえてひかる
もう一枚がならんでひかる…
鳥はいつかずっとうしろの
練瓦工場の森にまはって啼いてゐる
あるいはそれはべつのかくこうで
さっきのやつはだまってくちはしをつぐみ
水を呑みたさうにしてそらを見上げながら
やっぱり墓の松の木などにとまってゐるかもわからない

一五六　鳥

一九三四、七、五、

この森を通りぬければ
みちはさっきの水車へもどる
鳥がぎらぎら啼いてゐる
たしか渡りのもずの群だ
田に水を引く人たちが
こっそりこっそり林のへりをあるいてゐるし
夜どほし銀河の南のはじも
白く光って見えるのであんなにひどくさわぐのだらう
けれども
わたくしが一あし林の中にはいったばかりで
こんなにはげしく
こんなに一さうはげしく
まるでにはか雨のやうになくのは
何といふおかしなやつだらう
こゝは大きなひばの森で
そのまっ黒ないちいちの枝から
どこら辺とも知れない空が
いろいろにふるえたり呼吸したり
いはゞあらゆる光の規約を示してゐる
…あんまり鳥がさはぐので
私はぼんやり立ってゐる…

みちはほのじろく向ふへながれ
一つの木立の窪みから
赤く濁った火星ものぼり
鳥は二羽だけいつかこっそりやって来て
何か冴え冴え軋って行った
あゝ風が吹いてあたたかさや銀の分子
あらゆる四面体の感触を送り
螢がこんなにみだれて飛べば
鳥は雨よりしげくなき
わたくしは死んだ妹の声を
林のはてからきく
　…それはもう、たれでもおなじことだから
　いまあたらしく考へなほすこともない…
草のいきれと樹脂のにほひ
鳥はまた一さうひどくさわぎだす
どうしてそんなにさわぐのか
はやしのなかは螢もかなりみだれて飛ぶし
みなみぞらでは星もときどきながれるけれども
しづかにやすんでかまはない

一八四　春

一九二四、八、二一、

空気がぬるみ、沼には鷺百合の花がさいた
むすめたちは、みなつややかな黒髪をすべらかし
あたらしい紺のペッティコートや
また春らしい水いろの上着
プラットフォームの陸橋の段のところでは
赤縞のずぼんをはいた老楽長が
そらこんな工合だといふふうで
楽譜を読んできかせているし
山脈はけむりになってほのかにながれ
鳥は燕麦のたねのやうに
いくかたまりもいくかたまりも過ぎ
青い蛇はきれいなはねをひろげて
そらのひかりをとんで行く
ワルツ第CZ号の列車は、
まだ向ふのぷりぷり顫ふ地平線に
その白いかたちを見せてゐない

三〇四　鳥がどこかでまた尖舌を出す

一九二四、九、一七、

針葉の方の樹木は
ピネンも噴きリモネンも噴き酸素も噴く
栗の木の方は
まずおきまりの酸素を出して、あとは緑のラムプをさらに吊りさ

げる
…林いっぱいの蜂のふるひ…
その栗の木の隙間から
さまざまの飾禾草（オーナメンタルグラス）の芒や
古くさい宝石針が射しこんでくる
華奢にひかって、ひるがへるのは何鳥だ
水いろのそら、白い雲
すっかりアカシヤづくりになった
…こんどは蟬の瓦斯発動機（ガスエンジン）が林をめぐり
日は青いモザイクになって砕ける…
鳥はどっかで
青じろい尖舌（シタ）を出すことをかんがへてるぞ
（Gaillardox-gaillardae）
ところがどうだ諸君
森ぜんたいの空気の分を、百分の一リットルごとに
蜘蛛がすっかり糸で区劃りをつけてゐる
たまたま林の上であのまっ青な凹面鏡がゆすれると
そらはまるで暗い虹だの
顫へる波でいっぱいになる
そのたゞなかを
そのたゞなかを
あのありふれた百が単位の羽虫の群が
ミクロドーム（ママ）にやられずに
光って光って自由自在に飛んでゐる
もうかうなると概然論もいかものなどでは間に合はない
羽虫がさういう性質だとでもするんだな
（Gillochindox-gillochindae）
鳥がどこかで
また青じろい舌を出す

三一七　過労呪禁

一九二四、一〇、一一、

なんぼあしたは木炭を荷馬車に山に積み
くらいうちから町へ出かけて行くたって
こんな月夜の夜なかすぎ
稲をがさがさ高いところにかけたりなんかしてゐると
…あんな遠くのうす墨いろの野原まで
葉擦れの音も聞えてゐたしどんな苦情が来ないもんで
ない
おまけにそうら[注6]
そうらあんなに
苗代の水がおはぐろみたいに黒くなり
畔に植はった大豆（まめ）はどしどし行列するし、
十三日のけぶった月のまはりには、
十字になった白い暈さへあらはれて、
空も魚の目玉に変り

いづれあんまり録でもないことが、
いくらもいくらも起ってくる
おまへは底びかりする北ぞらの
天河石のところなんぞにうかびあがって
風をま喰ふ野原の慾とふたりづれ
威張って稲をかけてるけれど
おまへの大事な女房は
下でつかれて酸乳みたいにやわくなり
口をすぼめてよろよろしながら
丸太のさきに稲束をつけては
もひとつもひとつおまへに送り届けてゐる
どうせみんなのとれないときに逆に旱魃でみのった稲だ
もういゝ加減区劃りをつけてはねおりて
あいつを抱いてやったらどうだ

三三一　凍雨

一九二四、一〇、二四、

つめたい雨も木の葉もふり
みんなはけらで行き急ぐ
　…凍らす雨によみがへり
　　縮れた雲にわらふもの…
林は黝くすゝきのまばらな穂もひらかず
風のあかりやおぼろな雲にあらはれながら
きゃらの木が塔のかたちにつくられたり
廐のまへでトマトが青く腐ったりする
北は鍋倉円満寺
南は太田飯豊笹間
渡りのむくのひと群が
雨やエレキに溶かされて
きれいな白い骨ばかり[注7]
雲すれすれその天末の氷の環に翔けて行く

三三三　客を停める[注8]

一九二四、一一、五、

それではなんて帰るのか
まあ待ちたまへ
あすこの虹の門をくぐって
凍った風をひといき吸へば
あとはもうあんなまっ赤な山と谷
　…こんもりと松のこもった岩の鐘…
どこから雨が落ちかぶさるかわからない
電信ばしらも林の稜も

つなみみたいに一度に鳴って
虹はあらゆる毒剤よりも鮮らしく
青いアークをそらいっぱいに張りわたす…[注9]
まあ掛けたまへ　掛けたまへったら
雨どこじゃない氷だよ
どこでそいつが落ちかぶさるかわかったもんか
　…麦のはたけのまだうらかな緑の上を
　　木の葉はまるで鼠のやうに
　　ぐらぐら東へ流される…
まあもう少し掛けたまへ
ぢきにきれいな天気になるよ
シガーを一つあげるからキャベヂで巻いたシガーをさ

三三一　孤独と風童

一九二四、一一、二三、

シグナルの、赤いあかりもともったし
プラットフォームは
Yの字をしたはしらだの
犬の毛皮を着た農夫だの
けふもすっかり酸えてしまった
東へ行くの？
白いみかげの胃の方へかい
さうではおいで
行きがけにねえ
向ふの
あの、ぼんやりとした葡萄いろのそらを通って
大荒沢やあっちはひどい雪ですと
ぼくが云ったと云っとくれ
ぢゃさようなら

三三八　異途の出発

一九二五、一、五、

月の惑みと
巨きな雪の盤とのなかに
あてなくひとり下り立てば
あしもとは軋り
寒冷でまっくろな空虚は
がらんと額に臨んでゐる
　…楽手たちは蒼ざめて死に
　　嬰児は水いろのもやにうまれた…
グラウンドの雪いちめんに
たくさんのたくさんの尖った青い燐光が
そんなにせはしく浮沈すれば
わたくしはとめどなく泪がながれる

…アカシヤの木の黒い列…
みんなに義理を欠いてまで、気負んだ旅に出るといっても
結局荒んだ海辺の原や
林の底の渦巻く雪に
からだをいためて来るだけだから
ほんたうはもうどうしていいかわからない
…底びかりする水晶天の
ひとひら白い裂罅です…
雪がいっさううつくしくきらめいて
あくまでもわたくしをかなしくする

三五八　峠

一九二五、一、九、

あんまり眩ゆく山がまはりをうねるので
ここらはまるで何か光機のうねりのやう
蒼穹ばかり、いよいよ暗く陥ち込んでゐる、
（鉄鉱床のダイナマイトだ
いまのあやしい呟きは！）
冷たい風が、せはしく西から襲ふので
白樺はみな、ねぢれた枝を東のそらの海の光へ伸ばし
雪と露岩のけはしい二色の起伏のはてで
二十世紀の太平洋が
青くなまめきけむってゐる
黒い岬のこっちには
釜石湾のエメラルド
…そこでは叔父のこどもらが
みんなすくすく育ってゐた…
あたらしく風が翔ければ
白樺の木は鋼のやうにりんりん鳴らす

四〇一　氷質の冗談

一九二五、一、一八、

職員諸兄　学校がもう魔術をかけてしまはれ
まるで砂漠のなかに来てゐるのです
杉の林がペルシャなつめに変ってしまひ
雲の花壇も藪もはたけもみな喪くなって
そこらはいちめん氷凍された砂けむりです
白淵先生　北緯三十九度あたりまで
アラビヤ魔神がはたらくことになったのに
大本山からなんにもお振れがなかったのですか
さっきわれわれが教室から帰ったときは
そこらは賑やかな空気の祭
青くかがやく密教風の天の椀から

ねむや鵝鳥の花も胸毛も降ってゐました
それからあなたが古い帳簿を二冊綴ぢ
わたくしが火をたきつけてゐたそのひまに
この妖質のみづうみが
ぎらぎらひかってよどんだのです
えゝ　さうなんです
もしわたくしがあなたの宗の管長ならば
こんなときこそ布教使がたを
みんな巨きな駱駝に載せて
あのほのじろくあえかな氷霧のイリデゥセンス
蛋白石のけむりのなかに
もうどこまでも出してやります
そんな沙漠の漂ふ大きな虚像のなかを
あるひはひとり
あるひは兵士や隊商たちの仲間にいれて
燃く息づくらくだのせなの革嚢に
世界の痛苦を一杯につめ
極地の海に堅く封じて沈めることを命じます
そしたらたぶんそれは強力なイリドスミンの龍に変って
世界一ぱいはげしい雹を降らすでせう
そのときわたくし管長は
ボルドー…
その他甘美な葡萄の産地に対し
乱積雲に葡萄弾（グレプシヨット）を射つやうに命じ
その損害を防いだ上は
射撃して今年の酒を高価にせぬやう電令し
それからあとは
東京の中本山の玻璃で
二人の侍者に香炉と白い百合の花とを捧げさせ
空を仰いでごくおもむろに
龍をなだめる二行の迦陀を作ります
　いや、ごらんなさいたうたう新聞記者がやってきました

四〇八　昇幕銀盤

一九二五、一、二五、

寅吉山の北のなだらで
雪がまばゆい銀盤になり
山稜の藍いろの木の昇幕列が
そこに立派な像をうつし
またふもとでは
枝打ちされた緑褐色の松並が
弧線（アーク）になってうかんでゐる
恍とした佇立のうちに
雲はばしゃばしゃ飛び
風は

中世騎士風の道徳をはこんでゐた

四〇九　冬

一九二五、二、五、

がらにもない商略なんぞたてやうとしたから
そんな嫌人症（ミザンスロピー）にとっつかまったんだ
　…とんとん叩いてゐやがるな…
なんだい、あんな、二つぼつんと赤い火は
　…山地はしづかに収斂し
　　凍えてくらい月のあかりや雲！…
八時の電車がきれいなあかりをいっぱいのせて
防雪林のてまへの橋をわたってくる
　…あゝあゝ風のなかに消えてしまひたい…
蒼ざめた冬の層積雲が
ひがしへひがしへ畳んで行く
　…とんとん叩いてゐやがるな…
世紀末風のぼんやり青い氷霧だの
こんもり暗い松山だの　か
　…ベルが鳴ってるよう…
向日葵の花のかはりに
電燈が三つ咲いてみたり
青銅の獅子のかはりに
督学官を飾ってみたり
暴動の起るかはりに
農業倉庫が建ってできてみたり[注10]
　…ムーンディーアサンディーアだい…
巨きな雲の欠刻
　…いっぱいにあかりを載せて電車がくる

四一九　映画劇「ベーリング鉄道」序詞

一九二五、二、一五、

これは吹雪（ふぶき）が映したる
硼砂の嵐、Lap Nor（湖）の幻燈でございます
まばゆい流砂の蜃気楼でございます
この地方では吹雪はこんなに甘くあたたかくて
恋人のやうにみんなの胸をせつなくいたします
雲もぎらぎらにちぢれ
木が幻照のなかから生え立つとき
翻へったり砕けたり或は全い空明を示したり
吹雪はかゞやく流沙のごとくに
地平はるかに移り行きます
それはあやしい火にさへなって
ひとびとの視官を眩惑いたします

或は燃えあがるボヘミアの玻璃
すさまじき光と風との奏鳴者
そも氷片にまた趨光の性あるか
はた白光の極を索むる泳動か
旋る日脚に従って
（そらのフラスコ）四アールの散乱質は
地平はるかに遷り行きます
その風の脚、
まばゆくまぶしい光の中を、
いまスキップといふ形をなして
一つの影こなたへ来れば
いまや日は乱雲に落ち
そのヘリは烈しい鏡を示します

五一一　霰の前

一九二五、四、一一、

県道（みち）のよごれた凍み雪が
西につづいて氷河になり
悼んでくらい丘丘を
春のキメラがこっそり翔ける
月が
いまは鉛にかはってゐる
北でひとつの松山が
よどんで重い夜中の雲に
なかばどんより消されてゐると
黒い地平のはるかなはてで
ガラスの鳥も軋ってゐる
…眼に象って
泪をたゝえた目に象って…
丘いちめんに
風がごうごう鳴ってゐる
そしてこゝろはしづかな風の底なので
笹がすこうしさわぐきり
かれ草はみな
ニッケルのアマルガムで
眠さも沼になってゐる
（わたくしの拵えた蝗を見てください）
（なるほど Rocky mountain locust といふふうです
白堊（チョウ）でヘリを隈どった黒の模様がおもしろい
それは一疋だけ見本ですね）
月はいま[注11]
巨きな白い喪服をつける

五一九　春

一九二五、四、一二、

烈しいかげらふの波のなかを、
紺の麻着た肩はゞひろいわかものが
何かゆっくりはぎしりをして行きすぎる
どこかの愉快な通商国へ
挨拶をしに出掛けるとでもいふ風だ
　…あをあを燃える山の雪…
かれくさもゆれ笹もゆれ
こんがらかった遠くの桑のはたけでは
煙の青い lento もながれ
崖の上ではこどもの凧の尾もひかる
　…ひばりの声の遠いのは
　　そいつがみんな
　　かげらふの行く高いところで啼くためだ…
ぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっはぎしりをして
ひとは林にはいって行く

五二〇　巨杉

一九二五、四、一八、

そいつは四っつ
いつもの巨きな
地蔵堂の杉だけれども
けふはいったい何にかはったつもりだらう
青くひかった天椀に白金黒だの緑青だの
もくもくもくもく力いっぱい盛りあがる
地獄のまっ黒けの花椰菜め！
雲を引っ掻く鉄の箒め！
樹に変へられた古唐獅子のばけものめ！
木のうしろには桜もしだれやなぎもまはり
蕾蓮華のかたちの窓や
古びて小さな天台寺桜場寛の育ったうちだ
かしこくむら気な寛がこゝらであそんでゐて
この木を木だと思ったことがあっただらうか
下には冴えたきゃらの木と
赤い鳥居が炭酸水に色あせて
そのうしろでは
鳥もすだけば
こどものボールもひかって飛ぶ

三二六　風と木

一九二五、四、二〇、

風が吹き風が吹き

残りの雪にも風が吹き
猫の眼をした神学士にも風が吹き
風が吹き風が吹き
吹き吹き西の風が吹き
はんの木の房踊る踊る
偏光！斜方錐！トランペット！
はんの木の花踊る踊る
風が吹き風が吹き
青鉛筆にも風が吹き
かへりみられず棄てられた
詩の憤懣にも風が吹き
はんの木の花おどるおどる
（塩をたくさんたべ
水をたくさん呑み
塩をたくさんたべ
水をたくさん呑み…）
風が吹き風が吹き
吹き吹き西の風が吹き
はんの毬果はゆれるゆれる
レンズ、ヂーワン、グレープショット！
はんの雄花はこんどはしばらく振子になる

三二七　清明どきの駅長[注12]

一九二五、四、二一、

こごりになった古いひばだの
盛りあがった松ばやしだの
いちどにさあっと青くかはる
かういふ清明どきはです
線路の砂利から紅い煉瓦のランプ小屋から
いぢけて倭い防雪林の杉並あたり
ぎらぎらひかるかげらふが
雪でたまった沼気や酸を
せはしくせはしく掃くのです
…手袋はやぶけ
肺臓はロヂウムから代填される…
また紺青の地平線から
六列展く春のグランド電柱に
青くわななく金属線が渡されて
碍子もみんなごろごろ鳴れば
馬はそいつを蜂かと思ひ
汽車は触媒の白金を噴いて
線路に沼った黄色な草地のリボンを燃やし
ことしの禾草に加里と燐とをやりながら
なかを走って来るのです

くらかけ山からこゝらへかけて
夜通しぶうぶう鳴らした鳥がいまいっぴきもゐないのは
やっぱり屈折率の関係らしい
Gyāgya 別のがいたぞ鳥は青い紐である
Gyāgya 鳥はあんまり生意気である
Gyāgya 味曽漬け二十八ポイント五！
Gyāgya みたいな二十七！
Gyāgya 鳥のつら二十七！
はじめのがいちばん声がみぢかいのに
二十八ポイント五とはどういふわけだ
帽子を投げて眼をひらけ
つめたい風がながれる

三三六　春谷暁臥

一九二五、五、一一、

雪の円錐
その裾かけて撒き散らされた銅粉と
あかるく亘る禁欲の天
卓のかたちの安山岩と
あをあを燃える山の岩塩（し）（ほ）
酪酸のにほひが帽子いっぱいで
黒くて厚い穹窿を張り
水のやうに谷をわたる風の流れと
まっしろにゆれる朝の烈しい日光から
薄い睡酸を保護してゐる
…青いラムプのかげぼうし
コバルトガラスのかけらや粉
花さき繞る灌木の群
蕩児高橋亨一が
しばし無雲の天に住き数の（ママ）綏女とうち笑みて
ふたたび地上に帰りしに
この世のをみなみな怪しく
そのかみ帯びしプラチナと
ひるの夢とを組みたりし
鎖もわれにはなにかせんとぞ嘆きける
ゆふべ凍った綏（に）子の月を

三四〇　瓔珞節

一九二五、五、二五、

崖の上ではにはとこが
月光いろに咲き出すし
くるみの木には
まばゆい青や緑金や
瓔珞がみなかけられる

（悲しさが

そのきゃらの木の
尖った塔を刈り上げたのだ)

そらでは春の爆鳴銀が
甘ったるいアルカリイオンを放散し
鷺やいろいろの巣鳥の絙が
ぎゅっぎゅっ乱れて通って行く

ぼんやりけぶる紫雲英の花簇と
茂らうとして、まづ赭く灼けた芽を出すかつらの樹

三四五　陸中の五月

一九二五、五、三一、

くわりんの花もぼそぼそ暗く燃えたてば
鉛の水は稲田をわたり
Largo や青い雲滃(かげ)やながれ
馬もゆききし
ひともうつつにうごいてゐる
　並木の杉の黒緑の列
　あやしく曲り惑むもの
　あるひは青い蘿をまとふもの
風が苗代の緑の氈と
はんの木の葉にさゝやけば
馬は水けむりをひからせ
こどもはマオリの呪神のやうに
小手をかざしてはねあがる
　…あまずっぱい風の脚
　　あまずっぱい風の呪言…
小鳥は楢の林のなかで
豆やガラスやあらゆる穀粒を撒き散らし
郵便の集配人は
所在なく小みちをかへる
畦はたびらこきむぼうげ
また田植花くすんで赭いすいばの穂
　…いま山脉の襞ごとに
　　まっ白な霧があがって…
かくこうもしばらくうたひやみ
ひともつかれて泥(を)一種の飴とかんがへ
水をぬるんだスープとおもひ
またたくさんの銅のランプが、
畔で燃えるとかんがへながら
もうひとまはり代を掻く
　…たてみがを白い夕陽にみだす馬
　　うなじを垂れてしばし畦の草を食ふ馬…
檜葉かげろへば
赤楊の木鋼のかゞみを吊し

人はメフェストフェレス気取りで
黒い衣裳の手をひろげ
またひとしきり燐酸をまく
　…さっとひらめく水けむり
　　あっちもこっちもたてがみを残りの夕陽にみだす馬…
湿って桐の花が咲き
そらの玉髄しづかに焦げて盛りあがる

三六九　Jaz（ママ）岩手軽便鉄道

一九二五、七、一九、

ぎざぎざの斑糲岩の岨づたひ
ぼろぼろ青い波をながす
北上第七支川の岸を
せわしく顫へたびたびひどくはねあがり
まっしぐらに西の野原に奔けおりる
岩手軽便鉄道の、今日の終りの列車である
ことさらにまぶしさうな眼つきをして
夏らしいラヴスィンをつくらうが
うつうつとしてイリドスミンの鉱床などをかんがへやうが
木影もすべり
種山あたり雷の微塵をかがやかし
どしゃどしゃ汽車は走って行く
おほまちよひぐさの群落や
イリスの青い火のなかを
狂気のやうに踊りながら
第三紀末の紅い巨礫岩の截り割りでも
ディアラヂットの崖みちでも
一つや二つ岩が線路にこぼれてやうが
積雲が灼けやうが崩れやうが
こっちは最終の一列車だ
シグナルもタブレットもあったもんでなく
とび乗りのできないやつは乗せないし
とび降りなんぞやれないやつは
もうどこまでも載せて行って
北極あたりで売りとばしたり
銀河の発電所や西のちぎれた鉛の雲の鉱山あたり
監獄部屋へ押し込んだり
葛のにほひも白い火花もごっちゃごちゃ
ちょっとやそっとカーヴが外へ食み出てやうが
四寸や五寸ガードが下へへこんでやうが
接吻（キス）をしやうが詐欺をやらうが
こっちは最后の一列車だ
香魚のはなしも選挙地盤のいきさつも
白い帽子も永久的な信頼も
どんどんうしろへ飛ばしてしまひもう一さんに
西の野原へかけおりる

本社の汽車は、
元来動揺性にして、運動はなはだつねならず、
されどまたよく鬱血をもみさげ
…Prrrrrr Pirr…
筋をもみほぐすが故に
のぼせ性こり性の人に効あり
さうさう
いまごろ熊の毛皮を着て
黄金の目をした人が来やうが
シャープ鉛筆きらりとひかり
そこらで婚約がなりたたうが
いるかのやうに踊りながらはねあがりながら
もう積雲の焦げたトンネルを通り抜けて
どんどんどんどん野原の方へおりて行く
愛敬すべきわが熊谷機関手の運転する
岩手軽便鉄道の最后の下り列車である

三七〇　電軌工事

一九二五、八、一〇、

…朝のうちから稲田いちめん雨の脚…
カーヴのところは
X形の信号標や　はしごのついた電柱や
風の廊下といふふうにできあがった
…青く平らな稲田のなかのはなしだよ…
親方は信号標のま下に立って
びしゃびしゃ雨を浴びながら
ぢっと向ふを見詰めてゐる
…雨だか雲だか向ふはくらいよと…
そのこっちでは工夫が二人
つるはしをもちしょんぼりとして、稲びかりから漂白される
…どなたかお待ちの電燈(あかり)が一つよと…
やあ　汽罐車がやってくる
日露戦争のときのワリヤーク号みたいに
黒いけむりをもくもく吐いて
雨を二つに分けながらそこらの盛られたゆるい砂利だの稲田だの
地響きさせて走ってくる

三七五　下背に日の出をもつ山に関する童話風の構想

一九二五、八、一一、

つめたいゼラチンの霧もあるし
桃いろに燃える電気菓子もある
またはひまつの緑茶をつけたカステラや
なめらかでやにっこい茶や橄欖(オリヴ)の蛇紋岩
みやまつりがねにんじんの青い花には露がきらめき

ブリューベルの花きらめくきらめく
みやまうゐきゃうの香料から
蜜やさまざまのエッセンス（にほ）
碧い眼をした蜂もふるふ
そこには碧眼の蜂もふるふ
むかし風の金米糖でも
wavelite（ママ）の牛酪（バター）でも
またこめつがは青いザラメでできてゐて
さきにはみんな
干し葡萄がついてゐる
こいつがみんなほんもので
きみたちにもあげられるならどんなにいゝか
もっともぼくはさっきから
そのうちいまにあすこの岩の格子から
まるで恐ろしくぎらぎらに溶けて
光焔（ほのほ）をあげた青い宝珠がでてくるか
それともそいつが巨きな銀のラムプになって
まっ白な雲の野原をころがるか
さうだとすればあるひはいゝかも知れないな

三七七　九月

一九二五、九、七、

校圃（はたけ）を抜けて
アカシヤの青い火のとこを通り
燕が鰯みたいに飛びちがふのにおどろいて
風に帽子をとられさうになり
東の山彙の縞に挨拶を抛げ
水のたまりをすぽんととべば
あとは
Fox tail grass 緑金のもやうと
何でももうぐらぐらゆれるすすきだい
　…山では雨も降れば
　　ぼうと濁った陽もそそぐ…
白いシャツもダイナモになる
さて、地平線を行く電線や
汽車の cork screw かね
Fortuny 式の照明かね

四〇三　銀河鉄道の一月

一九二六、一、一七、

ぴかぴ（ピカピカ）かぴか（ピカピカ）田圃の雪がひかってくる
河岸の樹がみなまっ白に凍ってゐる
うしろは河がうららかな火や氷を載せて
ぼんやり南へすべってゐる
（よう）くるみの木　ジュグランダァ　鏡を吊るし

（よう）かはやなぎ　サリックスランダァ　鏡を吊るし
はんのき　アルヌスランダァ　鏡を吊るし
からまつ　ラリクスランダァ　鏡を吊るし
グランド電柱　フサランダァ　鏡を吊るし
さはぐるみ　ジュグランダァ　鏡を吊るし
桑の木　モルスランダ　鏡を…
ははは、汽車がたうたうななめに列をよこぎったので
桑の氷華はふさふさ風にひかって落ちる

注1　「二五　早春独白」5・6行目は、推敲段階で、「磐（いは）のあかりと／暗んで過ぎるひばのむら…」の詩句が併存したまま、共に抹消されずに残っている。この別案は、「走り書き」（校本全集、第三巻校異）のため、初案を採った。

注2　「二九　休息」4行目「雲の肖顔（ママ）」は、はじめ「雲の肖像画」となっていたのを、「雲の肖顔貌」とし、「雲の肖顔」とおさまつたもの。「肖顔」はニガオと読ませるか。

注3　校本全集第三巻校異は、この箇所について『『四部輪唱』から右方欄外へ線を引き出し『瑞西牧笛（コーランクレー）』と記してあるが、元の『四部輪唱』も消していない。」と注記する。初案を採った。

注4　雨雲・ニムブスは、同じ大きさで併記され、雨雲の左側にニムブスと書かれているが、「カタカナはルビか」との校本全集編者に従った。

注5　「二七　鳥の遷移」8行目下方に「※」の印あるが、この行への手入れは、「※」印に「重なるのもかまわずなされている。」（校本全集第三巻校異）また用紙末尾に、「※」を付して次の詩句が書かれている。先の「※」印箇所へ挿入する意図か。

そんな図形は鳥の啼くと啼かないとの
かういふ盈虚のなかにもあれば
あの質樸な音譜のうちにもはいってゐる
第六交響楽のなかでなら
もっとひらたく投影される

注6　この行は、あるいは、段下げ無しか。

注7　「きれいな白い骨ばかり」と「雲にすれすれその天末の氷の環に翔けて行く」の行間に「V字形」の記入あり。一行あけの指定と判断する。

注8　下書稿㈢（黄野詩稿用紙）に至ると、作品番号は「三〇五」に変えられ、題名が失われる。

注9　行末の「…」は消し忘れか。

注10　「建ってできて」は、最初「建って」であったところに、「できて」を付加したもの。「できて」に代えたのち「建って」を消し忘れたものか。

注11　この行と次の行には、「おゝ月の座の雲の銀／怒って巨きな白い喪服をつけたのだ」の別案がある。

注12　本作品の詩稿用紙「左方欄外」に鉛筆で「何か物足らぬところあり／要再考！」と書いて、また削除してある。

補遺　次に掲げる作品は、本構想に入る可能性あるものの、全面に鉛筆の斜線を付されたり、下書稿㈡段階で㊇印が付された作品であるため、構想に入れるのを保留した。

〔二一〕　痘瘡

日脚の急に伸びるころ
かきねのひばの冴えるころは
こゝらの乳いろの春のなかに
奇怪な紅教が流行する

注　下書稿㈡の最終形態を掲げた。下書稿㈡に㊇印が付されている。なお、作品番号、日付ともに下書稿㈡には記されていない。

五三　休息　　一四二四、四、一〇、

風はうしろの巨きな杉や
わたくしの黄いろな仕事着のえりを
つぎつぎ狼の牙にして過ぎるけれど
わたくしは白金の百合のやうに
　…三本鍬の刃もふるへろ…
ほのかにねむることができる

注　校本全集第三巻校異には「全体が太い鉛筆の左右にうねった線を付されて削除されている」と記されている。しかし、本作品の用紙には、㊇印が付されている。

四一五　四聖諦　　一九二五、二、一五、

雪を穿った洞の奥
暮れちかい
吹雪の底の半分暮れた店さきに
小さないちはの家鳴
　崩黄いろしたきれいな頸を
すなほに伸ばして吊り下げられる
　…屠者はおもむろに呪じ
　　鮫の黒肉(み)は凍る…
粉雪のいく度の擦過のなかから
巡礼に出た百姓たちの、鈴のひびきがきこえてくる

注　下書稿㈡の最終形態を掲げた。下書稿㈡用紙に、△印・㊇印ともに付されている。下書稿㈠は、「魚商」という題でひとたび完成していたものの、その後全般的な詩句の入れ代えを試みている。下書稿㈠の成立時と、下書稿㈡の成立時の時間的隔たりは不明。